

# 水産業に携わる人々の工夫や努力、願いを捉えることによって、水産業の未来を主体的に考える学習

～5年「水産業のさかんな地域」の実践を通して～

松田 隆之

## I はじめに

2014年に公表された内閣府による「平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」において、他国との比較から、日本の若者の社会参画意識が極めて低いことが明らかになった。

このような結果から、将来の国や地域の担い手として積極的に社会に参画したいという意識を子供たちに育ませることが急務であり、社会科の役割が一層重要になることが十分に読み取れる。

本校においても、社会科の学習と現実社会との間に隔たりがあり、自分を様々な立場に置換させながら問題解決していくことに難しさを感じている児童が多く、社会の形成者として根拠に基づいて議論することに課題があった。

そこで、今、社会科で求められていることと、本校社会科における課題から、社会的事象の見方・考え方を働かせ、多面的・多角的な視点で考察・構想する学習づくりを試みた。

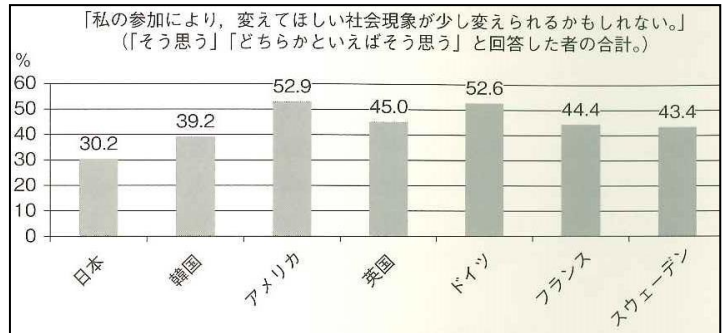
本実践は、資料から「生産量の減少」「水産業従事者の減少」といった日本の水産業が直面している今日的な課題を捉えるところから授業を開始した。そういった課題がある中でも、「我が国の1人当たりの食用魚介類供給量が世界でもトップクラスであること」や水産物の産地調べを通して「食卓には魚介類や水産加工品が並んでいること」を知り、私たちの食生活と密接に関わる水産業に携わる人々の営みに着目させた。その後、共感的理解を通して、生産者、消費者、水産庁という複数の立場から、「努力や工夫」について多角的に捉えていった。

考察や構想する場面では、水産業に携わる人々の「願い」に着目させた。既習事項である「努力や工夫」の意味を問いながら、「未来」「持続可能な社会」という時期や時間の経過の視点を働かせ、自分たちはどのように社会と関わるべきなのか考えさせた。

## II 研究の目的と方法

本研究では、子供たちが現実社会と向き合う中で問題意識や切実感をもち、多面的・多角的な考察や構想を通して、主体的に関わる態度を育てることができる指導方法について研究した。上記の実践の具体的な内容を以下の2点を中心に紹介する。

- 社会的事象の見方・考え方を働かせる手立ての工夫
- 主体的に社会に関わる態度を育てる学習の振り返りの工夫



資料1 平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査



自分たちの考えを交流する児童の姿

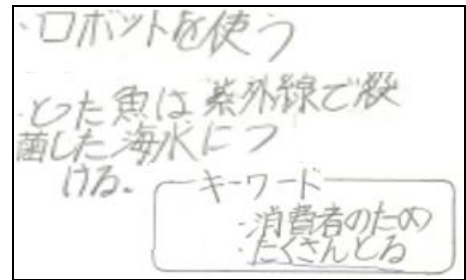
社会研究実践 五年 『水産業のさかんな地域』の実践を通して

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 社会的事象の見方・考え方を働かせる手立ての工夫

##### (1) 結果

本実践では、「事象や人々の相互関係」の視点を働かせることをねらいとして、水産業に携わる人々がどのような仕事をしているのか、個人で調べる活動時間を確保した。より問題意識をもって調べることができるよう複線化を図り、子供たちは、それぞれ「漁獲」「漁港」「輸送」の仕事について調べた。水産業に携わる人々の工夫や努力に着目できるよう、調べて分かったことを「エピソード」とし、そこから「キーワード」を考えていった。



資料2 児童が考えたキーワード

次に、全体交流の場で、自分が調べていない仕事のエピソードを友達から聞き、聞いたことを基にキーワードを考える活動を行った。調べたことを順に発表していくだけの活動にならないよう、聞き手の目的意識を明確にした。

「自分が調べた仕事のキーワードが他の生産者にも共通しているのか」という意識をもたせることで、自分の調べたことと他者の調べたことを照らし合わせながら、水産業に携わる人々の営みに着目することができた。

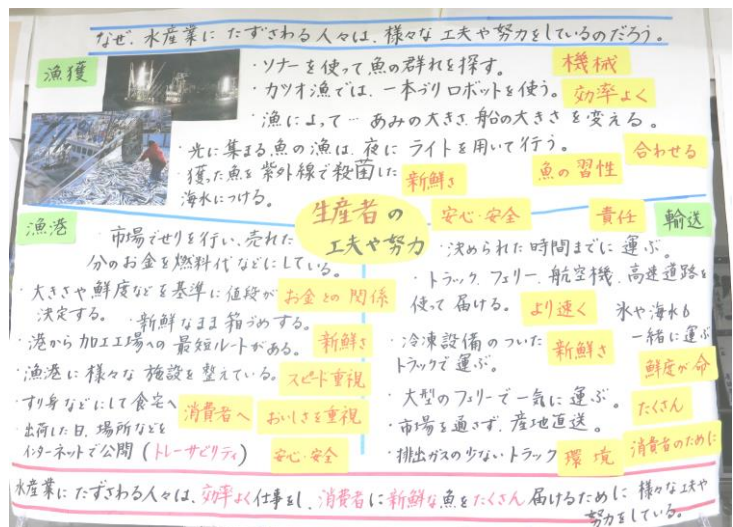


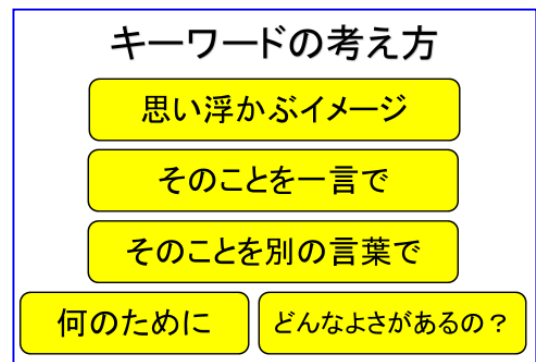
写真1 全体交流後の模造紙

本時では、「水産庁」という新たな立場で日本の水産業の未来を考えた。水産庁が設定している「漁獲可能量(TAC)」を扱ったのは、水産庁が漁獲可能量を設定している意味を考えることで、自分たちが調べてきた生産者だけではなく、水産庁という国の機関も日本の水産業を守っていこうとしていることを理解し、既習事項を踏まえながら水産業に携わる人々に共通する願いを考察させたかったからである。

子供たちは、学習問題づくりで用いた資料や調べ活動を通して学んだことから、水産物の生産量が年々減少していることを想起した。さらに、映像資料から公海でアジア各国がサンマなどの漁獲を行い、日本の漁獲量が減少傾向にあることを知り、水産庁が水産物の漁獲量を設定しているのは、「水産業の未来を考え、水産資源を守っていくためである」と捉えることができた。

##### (2) 考察

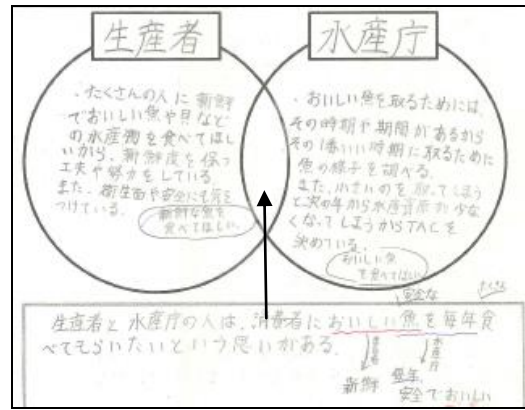
調べたことや友達から得られた情報を基にキーワードを考える場面で、「キーワードの考え方」として右の資料を提示した。右の視点でキーワードを考えていくことにより、水産業に携わる人々の工夫や努力の目的に迫ることができたと考える。また、水産業に携わる人々の営みをキーワード化していくことで、それぞれの仕事の共通点や関係性に着目しやすくなり、「事象や人々の相互関係」の視点を働かせながら、水産業に携



資料3 キーワードを考える時の視点

わる人々の「願い」を考えることができた。

また、水産庁と生産者の願いの共通点についてベン図を用いて考えたことにより、2者の願いが視覚化され、「消費者のことを考えている」「未来を見据えている」「水産資源を残そうとしている」という共通点に気付くことができた。



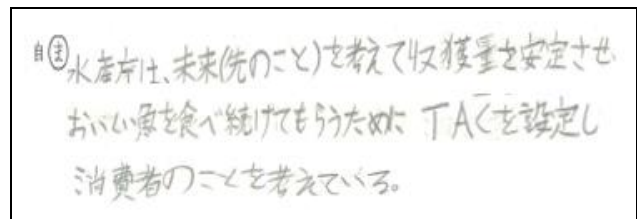
資料4 生産者と水産庁の願い

## 2 主体的に社会に関わる態度を育てる学習の振り返りの工夫

### (1) 結果

本実践では、1単位時間の中で「学習内容に対するまとめ」と「学習の振り返り」を記述する時間を設定した。前者は、その学習の中でどのようなことを学んだのか学習内容を振り返りながら自分の言葉でまとめ、後者は振り返る立場を指定し、その立場に自分を置換させ、学習を振り返るものである。

学習内容を自分の言葉でまとめることに難しさを感じている児童に対しては、抽象的な言葉を教師が提示し、より具体性のある言葉を児童に考えさせた。本時では、「なぜ、水産庁は漁獲可能量を設定したのだろうか」という学習内容に対して、「水産庁は、ある目的があって漁獲可能量を設定したということを学びました。では、ある目的とは何でしょう?」と児童に問いかけた。そうすることで、「ある目的」が焦点化され、授業の中で学習した言葉を用いながらまとめていく姿が見られた。



資料5 児童のまとめ

「学習の振り返り」では、学習者(小学5年生の自分)、消費者、生産者、水産庁といった多角的な視点で社会的事象を捉えることで、主体的に社会に関わろうとする態度を育みたいと考えた。どの立場で振り返るか1単位時間毎に設定したことにより、様々な立場で社会的事象を捉えることができた。また、学習を通して明らかになったことを根拠として振り返ることができ、書かれている内容もより具体的なものになっていった。

### (2) 考察

様々な立場で振り返ることによって、「学習内容に対するまとめ」とはまた異なる見方や考え方で、一つの社会的事象を多角的に捉えることができるようになった。

本単元のねらいは、「水産業に携わる人々の仕事について調べ、工夫や努力、願いを捉えるとともに、これからの水産業の在り方について考えることができるようにする。」である。海に面していない旭川市に暮らす子供たちが、水産業に携わる人々と接する機会をもつことは容易ではないが、社会的事象と密接に関係する人々の営みを捉え、自分なりに理解したことや立場を置換させて考えたことを言語化することで、日本の

視点(立場) 消費者	目立たない輸送などの作業も、目立つ漁港などの作業も生産者の人々が色々な工夫や努力を成り立たせていることを知りました。またしかり綺麗な作業をしていることが多くあまりできていないので、すごいなと思いました。入手(ひとて)がわりなくて、ロボットの機械類を使ってまで苦労して成り立たせているのかとて、(おどろ)感じました。このように色々な苦労をしている人たちがいるのだから、これから魚を食べる時は、よりかんぱいて
視点(立場) 消費者(研究会)	日本や外国の魚のためにTACを設定していることと知り、水産庁が水産資源を守りながら、生産量を調整して未来に受け継いでほしいという思いでTACを設定していると感じました。外国の魚の2倍(台湾・中国)も取っているのに、取れなくなるから、もう少く取ってほしいと、(おどろ)感じました。

資料6 学習の振り返り

ことのできるようにする。」である。海に面していない旭川市に暮らす子供たちが、水産業に携わる人々と接する機会をもつことは容易ではないが、社会的事象と密接に関係する人々の営みを捉え、自分なりに理解したことや立場を置換させて考えたことを言語化することで、日本の

水産業が直面している問題や未来の水産業の在り方について考えることができた。

また、授業の終末に自分の言葉で学習内容をまとめたり、学習の振り返りを記述したりすることによって、社会の形成者として自分の考えをもつことが大事であるということに子供たち自身が気付くことができているように感じる。学習が進むにつれ、学習の振り返りの視点を自分で考えることができるようになっていった児童が増えてきた。

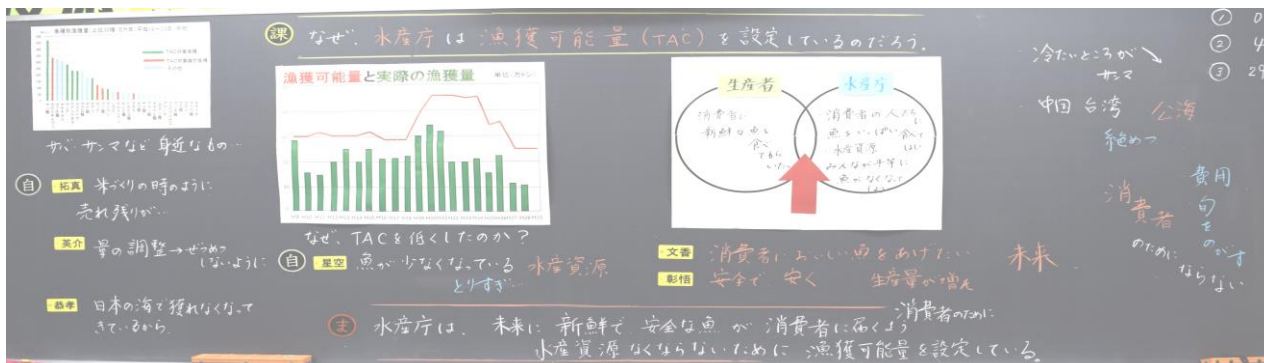


写真2 本時の実際の板書

#### IV まとめ

本研究では、子供たちが現実社会と向き合う中で問題意識や切実感をもち、多面的・多角的な考察や構想を通して、主体的に関わる態度を育てることができる指導方法について、「社会的事象の見方・考え方を働かせる手立ての工夫」と「主体的に社会に関わる態度を育てる学習の振り返りの工夫」の2点から論じた。その成果と課題を以下に示す。

##### 1 成果

- 自分が調べたり、友達から聞いたりしたことを基にキーワードを考えることによって、水産業に携わる人々の作業について調べたことに留まらず、人々の努力や工夫、願いといった内面に迫り、「事象や人々の相互関係」の視点を働かせながら主体的に問題解決する児童の姿が見られた。
- 学習内容について考えたり、学習を振り返ったりする場面において、消費者、生産者、水産庁等様々な立場で社会的事象を捉えることによって、社会の状況を幅広く視野に入れながら、より柔軟に自分の考えを構築することができるようになった。

##### 2 課題

- 個人で調べる活動を行い、複線化を図ったが、自分が調べていない仕事の工夫や努力の捉えが不十分になっている児童も見られた。今回は、仲間が伝えたエピソードからキーワードを考える活動を行ったが、他者の考えを聞き、自分の考えをより深めるためのポスターセッション等の活動についても研究を進めていきたい。

#### V 参考文献

- 小学校学習指導要領解説 社会編 文部科学省 東洋館出版社 平成20年8月
- 初等教育資料 No. 944 「学習指導要領における指導のポイント」  
文部科学省 平成28年9月号
- 初等教育資料 No. 953 「新しい学習指導要領改訂のポイント 社会科」  
文部科学省 平成29年5月号
- 澤井陽介の社会科の授業デザイン 澤井 陽介 著 東洋館出版社 平成27年3月
- 「公民的資質」とは何か ―社会科の過去・現在・未来を探る―  
唐木 清志 編著 東洋館出版社 平成28年11月

司会者 田村 貴史 (旭川市立陵雲小学校主幹教諭)  
助言者 関口祐太郎 (上川教育局指導主事)  
坂井 誠亮 (北海道教育大学旭川校教授)

## I 授業の部会から ※主なものを抜粋

水産庁が設定している漁獲可能量について知り、本時の学習内容を捉える場面について

〈授業者から〉

○本時までには、生産者として、漁をする人や漁港で働く人、輸送の仕事に携わる人々の工夫や努力、願いについて学習してきた。本時では、また別の立場の「水産庁」の営みについて学習し、より多角的に社会的事象を捉えることをねらった。事前アンケートの結果から、漁獲可能量についてほとんどの子が知らない状態であると捉えていた。「なぜ、漁獲可能量を設定しているのか」考察することができる時間になるよう、水産庁の願いを捉える学習内容にした。

〈参観者から〉

- 漁獲可能量と実際の漁獲量を一気に見せるのではなく、少しずつ見せる工夫がなされ、経年変化を捉えることができていた。
- 社会的事象を多角的に捉えることをねらって水産庁という立場を扱ったことで、子供たちの興味・関心が高まり、深い学びへ向かう準備を整えることができた。
- 学習内容を捉えるまでの資料が多過ぎた。本時の学習内容を照らし合わせ、資料を精選する必要があったのではないか。ここで時間がかかってしまった分、後半の振り返りの時間が足りなくなったように思う。

《生産者と水産庁の願いをベン図に記し、漁獲可能量設定の意味を考える場面》

〈授業者から〉

○社会的事象は、人々の働きや営みで成り立っており、漁獲可能量が設定された背景にも持続可能な社会を目指そうとする水産庁の人々の願いが存在している。既習事項と照らし合わせながら、水産業に携わる人々の視点が未来へ向かっていることに気付かせたかった。

〈参観者から〉

- 生産者と水産庁という異なる立場の願いの共通点を考えることで、「消費者」「未来」といったキーワードが子供たちの中から出されていた。既習事項と新しく学んだことを照らし合わせながら、自分の考えをもつことができていた。
- 一方の立場の願いが前時で明らかになっていて、本時でもう一方の願いが明らかになった。今回のように思考ツールを用いて比較することは、共通点や相違点を考えたりする上で非常に有効な手立てであると感じた。
- 生産者の願いとして押さえていたことが「消費者に新鮮な水産物を届けたい」という抽象的なものであるように感じた。実際に水産業に携わる人は、就業形態等の違いもあるが、より切実な願いをもっている。そういった現状を子供たちに伝えていくことが本当に正しいのかということも含め、今後、検討していく余地がある。
- 子供たち同士の意見を交流する時間があるとよかった。個人思考の段階で「未来」という視点を出すことができていなかった子もいた。全体交流の場で、「未来」という視点があることを知った時に、その子がどう感じたのかを共有していくことで、集団としての考えを発展させていくことができると思う。

## II 助言者からの講評 ※要点のみ

### (1) 関口祐太郎指導主事から

児童の実態把握を基に単元構成が考えられ、非常に提案性のある授業であった。先生が見取っている「資料やグラフを読み取ることが好き」という子供たちの姿が授業の中で見られた。さらに、子供たちの課題である「社会的事象の意味を考えたり、社会的事象と人々の営みを関連させて考えたりすること」からカリキュラムマネジメントの視点で単元全体を構成し、本時で「水産庁が漁獲可能量を設定している意味を考える学習」、次時で「広尾町のエゾバイツブの増殖に取り組む人々の願いを考える学習」を位置付けていた。事前調査から子供の実態を捉え、既習事項を生かしながら意味追究ができる単元構成になっていた。



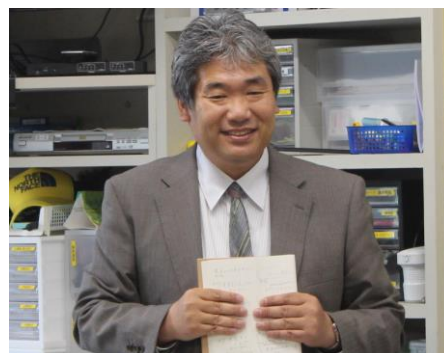
さらに、子供たちが主体的に学ぶことができるように、課題に対する自分の考えを予想させたり、学習内容を振り返ったり、キーワードを考えたり、前時に児童が書いたまとめを「まとめ大賞」として次時の冒頭で扱ったりするなどの手立てが取られていた。

本時では、「学習の振り返りの時間を確保することができなかった」ということであったが、「どんな力を身に付けさせたいのか」という授業のゴールイメージをもつことで、「どの資料で何を考えさせるのか」ということが明らかになり、問いと資料が精選されるのではないだろうか。

これからの時代は、「何ができるようになったか」「できたかどうか」ということが問われるようになってくる。よって、「学びに向かう力」「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力」といった資質・能力を身に付けさせる授業づくりをしていかなければならない。そのためにも「できたかどうか」という視点で、子供たちの姿を見取り、評価していくことが大切である。自分の考えを書くことが苦手な児童に対して、どのような手立てを取るのかということも含めてカリキュラムマネジメントをしていく必要がある。

### (2) 坂井誠亮教授から

前時の学習から授業を参観したが、子供たちが主体的に調べ活動を行っている様子が見られた。社会科は内容教科であるが、暗記だけの知識だけではなく、学ぶに向かう力というものが重要である。主体的に学ぶことができれば、内容の理解も自然と深まっていく。



本時では、これまでの「生産者は、生産量を伸ばすために様々な工夫をしている」という子供たちの捉えを変化させる水産庁の営みを扱った。子供たちの知的な好奇心を刺激するような教師の意図が見られた。

こうした子供たちの考えが大きく変化するような内容を扱うのなら、やはり子供たちの「予想」をより丁寧に扱いながら授業を展開する方法もあってはならないだろうか。私の目の前にいた児童は、「なぜ、水産庁は漁獲可能量を設定しているのだろうか」という学習内容に対する予想の場面で、「どこかの国が大量のさんまを獲っているから」という予想ができていた。授業の中盤で公海におけるアジア各国の漁獲の実態を捉える映像資料を見たときに、自分の予想が当たったことが分かり、とても喜んでいた。この子の予想の根拠を学級全体で共有する時間があれば、子供同士で意見を交わしながらより学びを深めていくことができたように感じる。

資料の準備など丁寧に授業づくりを行っていることもあり、先生が考えている意見が子供たちから出された時に、子供たち同士の意見交流がないまま授業が進んでいく場面があった。テンゴよく授業を進めることも大切なのだが、個人でじっくり考えたり、子供たち同士が互いの考えを交流したりする時間を確保していくことが子供たちの主体性を育むことにつながっていくのではないだろうか。